

ポンポンポン——緊急放送を告げるチャイムの音に、思わず有線放送器の方を見、そして耳を傾ける。電灯は消えてしまい、家の中はたった一本のろうそくの頼りない乏しい明りにぼんやりと照らされていた。

雨は土砂降り、本谷川は大きな石が流れているらしく、ごうごうと唸っている。百メートル程離れた教員住宅は危いというので、夕方のうちに先生方は、高台の学校に避難しておられた。

私の家は川からやや離れてはいるが、戸沢川と弓の又沢川との合流点に近いので、ひどい音がする。夜はますます暗いし、心はいよいよ乱れるばかり。

有線放送の緊急放送は、

「どこどこが全壊、半壊：：。」ということばかり。

消防団員も、夜というのに全員出動している。

忘れもしない——あの言葉。夜十時頃だったか、突然チャイムの音。はっと息をのむ。今度はどんなことかしら。ろうそくの明りで見える家族の顔には、淋しい悲しい色がうかぶ。

せきこんだアウンサーの声に、私はびっくりした。聞きまちがえではないかしらと我と我が耳を疑った。二度目にもおなじことをくりかえしたのだから間違いはなかった。

「横川のK・Oさんの家族が行方不明!」——と。

Kさんって、同級生のYさんがいるのに。Yさん、どうしているかしら。

炬燵から離れて、本谷川の見える窓の所に立った。窓には、外の様子を心配している人間の心など全然知らぬ気に、美しい匂いややさしい百合の花が活けられていた。本谷川は狂いに狂ったように、ごうごうと流れている。

Yさん達、みんな無事かしら。Yさんたち、一体何処へ行ったのかしら。若しかしたら皆駄目かしら。いや、きっと何処かで無事にいるのだろう。ろうそく一本が燃え尽くすまでに、どんなに時間のかかったことか。

有線放送はひっきりなしに被害を受けている場所を告げている。一睡もできないうちに、白々と夜が明けて来る。何だか恐ろしい朝だ。家の周囲を見る。見るも無残な荒らされ方だ。木造の神橋が流され、永久橋の弁天橋は半分流れ、畑は流れ、何もかもがらがらだ。

友と学校の方に行って、Yさんが亡くなったと聞いた。嘘ではないかしらと、何度も何度も念を押して聞いたが、やはり亡くなったという。

三十日には、学校では富士見台キャンプに行くことになっていたのに。食事は何にするか、副食物は、嗜好品はなどと、グループ別に話し合い、二十六日には雨の中を菓子を買に行き、YさんはC・Hさんに背負われて、運動場の水溜りを避けて来たのに。排水作業中のK先生が、その有様を笑って見ていられたのに。

山肌が地滑りをおこし、道路を越えて O さんの家をたたき潰したという。戸間口に立って、本家の手伝いに行くお父さんを見送っていた Y さんは、「わあっ」といいながら家にとびこみ、その俣亡くなってしまったのだと。翌朝明るくなってから、梁にしがみついた俣息絶えた Y さんが、土砂の下から発見されたのだと。

わずか十四才という若い生命を無残にも奪われてしまった友。私たちの学校は人数が少ないので、一人いなくなっても、数人いなくなったように淋しいのに。

人なつっこかった Y さん。小林旭のファンだった明るい少女の Y さん。親孝行で弟思いだった Y さん。私の頭からは、在りし日の Y さんの笑顔は何時までも消えることがないでしょう。

Y・O さん、何時までも、安らかにお眠りください。

(三十八年)